

明治日本における国士型一地理学者の対濠関心

—『志賀重昂先生：濠洲夢物語』の紹介を中心に—

宇 田 正

目 次

はじめに

I 国士型地理学者としての志賀重昂

II 『志賀重昂先生：濠洲夢物語』について

III 『志賀重昂先生：濠洲夢物語』（本文）

むすびにかえて

沖繩遙望濠洲路 青螺点綴山無數
葬身元分鰐魚腹 埋骨豈期旧墳墓
——官 沼 貞 風——

は じ め に

オーストラリア大陸にたいする我々日本人の関心は、太平洋戦争後、それも近年に至ってようやく一般的に高まりつつある。しかしながら、近代日本人の対濠関心ともいうべき心情は、けっして今日においてはじめて燃え上ったものではなく、むしろ古く、かつ深いものであった。元来、絶対的に狭少かつ鉱工業資源に乏しい島嶼性国土のなかで、相対的に過多な人口の生存を維持・拡充していくための国民経済の「近代化」システムに構造的に内在する脆弱性は宿命的なものとして、近代日本人に重々しく受けとめられて来ている。近代日本人は、それへの劣等複合感を振りはらうかのように、遠くはなれた南半球の、みずからと対蹠的な人口稀薄にして鉱工業資源に富む広大な新天地を、しばしば望見したものであった。その国民感情は、時としては国際政治的緊張のなかではげしく増幅されることもあった。たとえばそれは太平洋戦争中のわが国内における濠洲関係文献の出版ラッシュなどにも反映している。そして、いわゆるわが国民経済の構造的脆弱性が、近年のきびしい内外諸情勢の展開に規定されて、これまでより以上の全般的な深刻さを帯びて、いまや情報化社会のなかで多くの日本人の眼前に露呈され

つつあることが、今日の広汎な対濠関心の盛上がりとして現象しているといえよう。

本稿においては、現代日本人の対濠関心を、近代日本の政治経済的ビヘイビアを規定するエートスの一展開としてとらえ、その歴史的起点を明治20年代前期にまでさかのぼり、当時新進の国士型地理学者の発言に求め、当時の日本人の対濠認識の実態を確認するとともに、その関心の契機などをも考察して、現在のわが国における対濠関心のあり方のかえりみる一助としたいと思う。

I 国士型地理学者としての志賀重昂

本稿において史料として紹介するのは、かつて明治・大正期を通じてわが国の非官学系の代表的な地理学者・大旅行家として、学界のみならず政界にまでまたがる広汎な活動と業績とにより令名のあった志賀重昂（しが・しげたか）が、明治20（1887）年はじめて公刊に付した著書『南洋時事』のうちの、濠洲に関する文章のすべてである。

志賀重昂は、幕末もせまる文久3（1863）年11月15日三河国（現、愛知県）岡崎の地において岡崎藩士志賀重職の長男として出生した。三河岡崎は徳川家康ゆかりの古い城下町で、矢矧川（やはぎがわ）に臨むところから、重昂はのちに「矧川」を雅号としている。重昂の先考重職は武士ながら学問にすぐれ、藩主の命をうけて江戸の昌平黉に学び、同藩の藩士の子弟にもその教化薰陶を受けた者が多かったが、明治元（1868）年に病歿した。嗣子重昂は、まだ年少のため藩規により家禄を召上げられたので、以後母の実家で養育された。

尚学の人であった父の血をうけて重昂は、幼少の頃より学問に親しみ、明治7（1874）年5月、12才の若さで父の門人に伴われ東京に出て、芝の攻玉社に入り英学を修め、のち明治11（1878）年9月、大学予備門の入学試験に合格した。さらに同13年4月、北海道に赴き、同年9月、札幌農学校の入学試験に合格、第5期生としてここに学ぶことになった。「札幌農学校初期の卒業生は、殊に第一、第二期生はクラークの影響によって殆んど基督教徒となっている。そのうちに内村鑑三のいることは一般に知られている」¹⁾が、第5期生の重昂はみずからの「札幌在学日記」中に「嗚呼氏（内村鑑三——引用者註）は耶蘇教の徒なり。故に常に吾輩と仇敵なりし」²⁾と述べているように、キリスト教にはついに親しまなかった。しかし「基督教こそ志賀重昂は札幌農学校の生活から受けなかったが、その後の志賀重昂を志賀重昂たらしめた総べてがここで形成され方向づけられていたといっている」³⁾。こうして重昂は、明治17（1884）年7月、札幌農学校を卒業し、ただちに長野県立長野中学校に植物学担当の教諭として赴任し

1) 志賀重昂著・土方定一解題『知られざる国々』（明治文化叢書、日本評論社刊、昭和18年5月）P.19

2) 同上、P.18

3) 同上、P.19

たが、一年も経たぬ翌年の春、ある酒席で県知事と対立して免職処分を受けるに至った。

その後、重昂は東京にもどり、当時丸善書店において編纂中のヘボンの和英辞書の校正の仕事に就きわずかに糊口をしのぐことになった。しかしその生活の辛苦とはうらはらに、徳富蘇峯の言によれば「国粋論をがながんとなったやうな、気骨稜々たるところがあった⁴⁾」という若き日の重昂の国士的な血肉を躍らせずにはおかぬ時代が開けつつあったのである。時あたかも朝鮮半島をめぐる欧州列強間の政治的緊張が急激に高まりつつあった。すなわち明治17(1884)年、帝政ロシアが朝鮮と秘密条約を締結したことに刺激されて翌18年4月イギリスが巨文島を占領するという軍事行動に出たが、その後の外交交渉によりイギリスが撤退したことにより事無きを得たのである。この時、重昂は軍艦筑波に便乗して紛争地点に近接する対馬、朝鮮海峡まで赴いてつぶさに実地を視察しており、この時の重昂の調査所見はその後対馬警備隊および竹敷要港設置など軍事上の施設に際して大いに寄与するところがあったという。

次いで明治19(1886)年2月、海軍兵学校生徒の航海練習と南洋における欧米列強勢力進出の実況を視察するために南洋巡航の途に就いた軍艦筑波に、重昂はふたたび便乗の機会を得たのである。明治20年前後の太平洋海域においては、他の列強に遅れて領土分割戦に参入したドイツとアメリカの対立が激化しつつあった。軍艦筑波はまずはじめにその渦中にあるカロリン諸島を巡航し、重昂の眼にはドイツの勢力の進出がつよい印象をもって焼き付いたようである。やがて同年4月5日、軍艦筑波は濠洲シドニーに到着し、重昂もその記念すべき第一歩をこの新大陸に印した。「その夜、志賀重昂が市街を散歩し府民集議堂の前になると、なかは喧騒を極め、罵詈の語が堂内に沸騰している。『乃ち堂に入り会場に入れば、パークス氏（現時のニュー・サウスウェールズ州首相）がニュー・ヘブリーズ島事件に就き演説をなすものなり。蓋し、当時仏国は一群島なるニュー・ヘブリーズを新に占領したるを以て、濠洲人民はこれが為に激昂したるものなりと。』⁵⁾」あたかも当時、濠洲大陸の周辺の島嶼群はフランス、ドイツにより占領されており、本国イギリスから隔絶されている濠洲が国防地理上の見地から脅威をおぼえ、後年の濠洲連邦の成立にいたる政治的緊張が高まりつつある矢先であった。重昂はシドニーに滞在中、現地の新聞「シドニー・エコ」紙などに日本に関する文章を寄稿したり、各方面の名士と会見したりして、急速な「近代化」の途上にある極東の独立国家日本の紹介につとめる一方、濠洲の地理・人文・天然資源・政治経済・貿易などに関する資料・情報をも手広く蒐集したようである。それらの豊富な見聞の成果は、その後重昂がニュージーランド、フィジー、サモア、ハワイというコースを経て約10ヶ月の航海をおえて同年11月に帰国してから一気に書き上げて、翌20年3月に公刊した報告書『南洋時事』の中でも、とくに重きを成す濠洲関係の興味ふかく史料的にも価値高い記述として結実したのであった。

4) 同上、P.21

5) 同上、P.29

『南洋時事』が多くの読者を得て、重昂の南方進出論がしだいに国内に賛同の輪を拡げつつあった折も折、同年12月、いわゆるポナフィディン島置き去り事件が発生した。重昂は「東京横浜毎日新聞」紙上でこれを問題として痛論して世論を沸かせ、ついに政府を動かすに至った。政府は御用船芳野丸を同島に派遣、重昂もこれに便乗し、置き去りにされた同胞11名を救助したのであり、この事件を契機に同島は鳥島としてわが国の領治下に入り、のち東京府の所管するところとなった。

翌明治21（1888）年、重昂は同志とともに政教社を設立、神武天皇祭（4月3日）をトして雑誌「日本人」を創刊し、重昂自身その主筆として編集を担当した。同人のメンバーは、哲学館関係の三宅雪嶺・井上円了・辰己小次郎・柵橋一郎・加賀秀一・島地黙雷および東京英語学校関係の杉浦重剛・宮崎道正・松下文吉・菊地熊太郎・今外三郎・杉江輔人等であり、当初この二派が同様の主義と計画をもつに至ったことから、杉浦重剛の提案によって合同したものである。この政教社ないし雑誌「日本人」のもつ歴史的意義は、要するに「条約改正を目的として時の外務卿井上馨が行った欧化政策に対する反省として、また志賀重昂が『南洋時事』に於いて述べている独立日本を保持するための根本的態度としての国粹保存の主張として、生れた⁶⁾」というところに在った。

当時「雑誌『日本人』の初期に於ける志賀重昂は『農学士』という肩書を持つ特異な思想家として、また雄渾流麗な筆を揮ふ新鮮な『文章家』として、雑誌『国民の友』（明治21年1月創刊）の徳富蘇峰と対比されるやうな位置に立って天下の青年の視聴を集めていた。⁷⁾」重昂がとくに力説したのは、国粹保存・民力休養・租税軽減・殖産興業・農事改良・貿易奨励などの諸問題であり、あわせて条約改正に当っての「対外硬派」的主張にはかならなかった。明治23（1890）年には村山竜平の「国会新聞」に名誉客員として招かれ、越えて明治27（1894）年には全国新聞雑誌同盟の代表者に挙げられるなどジャーナリストとしても一流の座を与えられ、雑誌「日本人」を中心に華やかな論陣を張るとともに、重昂はその主義主張の実践をめざして政治活動にも進出するに至った。すなわち明治27年の段階で重昂は中央政社を主宰し、条約改正に当って「対外硬派」的立場をとる政界・言論界のいわゆる硬六派の大合同に際してその幹事として活躍し、のち明治29（1896）年、六派連合の所産として進歩党が結成されるやその幹事に推挙され、政党人として国政壇上に挺身することになった。しかも、その政治的活動の多端な中であって、重昂は本来の地理学者としての姿勢を崩さず、明治27年にはその代表的著作と評価の高い『日本風景論』を執筆、刊行し、あたかも日清戦争に際して国民的感情の盛り上がる中で、わが国土の景観美を学術的に解明したこの書物は祖国日本への愛をひろく国民一般に自覚、昂揚させるとともに、一大ベストセラーとして重昂の文名を一世に高からしめたので

6) 同上, P.36

7) 同上, P.42

ある。

まもなく明治30（1897）年7月、松方・大隈連合内閣の成立により政府与党となった進歩党および薩派の人事工作のため、内閣は官制を一部改正して同党派から人材を選び、政府高官のポストを与えた。重昂もこの人事により農商務省山林局長に就任したが、同年10月、地租増徴案の提出をめぐる内閣が分裂、大隈の挂冠にしたがい重昂も松方首相の政策を論難したため文官懲戒令によって免職させられた。しかし翌31年4月、大隈・板垣連合内閣の成立とともに重昂はふたたび政府に登用され、外務省勅任参事官を経て参与官に就任した。同年7月、マカオ島所属問題に取組み、東京府知事肥塚竜に働きかけて同島を東京府所管とし「南鳥島」と改称、公示せしめるなどの事績を挙げたが、同年11月の内閣の瓦解により下野するに至った。翌明治32（1899）年11月、中国大陸福建省に赴き、鉄道敷設踏査のため揚子江まで中国内陸部を横断旅行し、翌33年3月帰国したが、重昂の踏査した路線は、後年の対支21ヶ条要求の中に示されているという。

その後、重昂は進歩党の後身としての憲政本党に所属していたが、明治33（1900）年8月同党を脱退、翌9月伊藤博文の組織した立憲政友会に加盟し、同35年8月、総選挙に立候補して当選、衆議院議員となり、つづいて翌年3月の総選挙にも再選出された。こうした多忙な政界での活動のかたわら、重昂は本来の地理学研究をなおざりにせず、『河及び湖沢』（明治34年刊）、『外国地理参考書』（明治35年刊）など、専門的著述を公けにしている。重昂は、政治活動の渦中にあっても、ついに職業的政治家には成りきれぬ人物であったといえるのではないだろうか。かくて重昂は、明治37（1904）年3月の総選挙において100余票の僅差で落選したのを契機に、以後政治活動には関与せず、もっぱら学者・啓蒙家としての道を歩むことになったのである。

明治37（1904）年2月、日露開戦となり、重昂は同年6月従軍して大陸の戦線に赴き、満鮮各地を視戦して廻り、乃木希典の第三軍司令部に加わり旅順攻囲戦を視戦した。その後、樺太上陸軍にも参加し、全島視察の特許を得て樺太全島およびロシア領沿海州まで踏査の足をのばし、樺太国境画定に関する囑託として北緯50度線上に約半年間を困難かつ危険な実地調査に過ごし、戦後の39年11月東京に帰任、天皇に拝謁の栄を与えられた。この日露戦争に従軍した間の見聞・所感を日記風に克明に綴ったものが『大役小志』の題名で明治44（1911）年に公刊されたのである。

その後の重昂はいろいろな公的用務を帯びてしばしば世界各国に旅行をこころみ、大旅行家としての名声をほしいままにする。まず明治43（1910）年4月、重昂は海軍省の招待をうけ、南米アルゼンチン建国百年祭に際しての国都ブエノスアイレス市での万国アメリカ会議および英国ロンドンに於ける日英博覧会に出席のため、軍艦生駒に搭乗して世界一周旅行の途に就き欧州各国を巡歴して同年12月に帰国し、その旅行の見聞などを中心にして翌年9月『世界山水

図説』を公刊した。次いで大正元（1912）年5月から6月にかけて、排日問題の実情視察のためアメリカ合衆国カリフォルニア州へ、翌7月にはハワイ金曜会から招待されてハワイ諸島での講演のため渡航した。さらに大正3（1914）年ふたたびハワイ・マウイ教育会から招待されてハワイでの講演のため出発し、その後引きつづき英領カナダを視察し、さらに招かれてアメリカ合衆国ワシントン市での万国アメリカ会議に出席したあと、キューバ、メキシコと巡歴し、翌年4月に帰国した。同じ年の秋、招かれて満蒙地方各地を歴訪し講演をして大陸における日本人土着の必要性を遊説した。その後大正11（1922）年には東南アジア、南アフリカを経て南アメリカ各国を視察し、翌12年早春にかけて北アメリカ、ハワイ各地を巡歴し帰国した。しかも同年12月、ふたたび東南アジア、中近東を経て欧米諸国歴訪の旅に出発し、翌年7月に帰国するという精力的な旅行活動であった。とくに大正3年から4年にかけてと同じく大正11年から12年にかけての2回の世界的大旅行の見聞をもとに一冊にまとめられたのが『知られざる国々』⁸⁾（大正15年11月刊行）であり、これをその多産な著述生涯の最後の仕事として、重昂はその刊行の翌昭和2（1927）年4月6日、65才を一期として死去したのである。その歿後、昭和4（1929）年に至り『志賀重昂全集』全8巻が刊行された。生前、ブラジル国地学協会およびイギリス国王立地学協会の名誉会員に推挙されており、また教育者としては長きにわたり早稲田大学において地理学の講座を担当し、理論にあわせて豊富な実地踏査の裏付けにより興味ふかい講義を展開し、文化発展の軌跡にも観察をおこならぬ点にその学風の特徴があるとされた。

なお、その歿後10数年を経て、太平洋戦争の進展にともなうわが国官民の対南方関心の高まりのなかで、かつての重昂の南方進出に関する所論や業績があらためて時代の脚光を浴び、昭和18（1943）年1月には東半球協会により『南洋時事』の一部が本稿で紹介するように『志賀重昂先生：濠洲夢物語』として刊行され、また同年5月には日本評論社から明治文化叢書の一冊として土方定一の編集・解題により『知られざる国々』が刊行されたのである。ところが、戦後になって、重昂の名は、その明治日本人固有の国士型の発想や国粋主義ないし日本人海外進出推進の議論が、軍国日本の帝国主義的侵略のイデオロギーと短絡され、過去の謬見として久しく葬り去られていた観があった。ようやく戦後も終わったとされる1970年代に入って、中

8) 本稿は、とくに『知られざる国々』の著述内容についての詳しい紹介をすることを目的とするものでないので、ここでの縷説は避けるが、明治文化叢書本の土方定一による解題において同書は「『南洋時事』以来の、世界旅行家としての志賀重昂の最後の集積と帰結であり、志賀重昂が残したもののうちでは一番にまとまっている…（略）そればかりでなく、やはりいち早く日本人の眼を西南亜細亜に向けしめた書物として、そのことによって現在われわれが置かれてゐる重大な位置について予言し警告するところがあった書物として不朽の価値を持つ」（同書P. 71～72）と高く評価されている。その広汎な記述項目のうち一点だけを採上げるとして、たとえば大正末期という時点ですでに日本にとつての石油問題の深刻さを指摘しその解決のための石油政策を具体的に提案している先見の明からしても、著者重昂の観察眼は近・現代日本の政治経済の動向をすくなく見通し、石油資源確保についてまさに「現在われわれが置かれている重大な位置について予言し警告する」ものにほかならないと言えよう。

中央公論社から『日本の名著』シリーズの一冊として昭和45年3月、色川大吉の編集により岡倉天心の著作と抱き合わせで重昂の『日本風景論』が刊行された場合においても、編集・解題の重点が岡倉天心に置かれ、重昂の取扱いについてはいささか軽きに過ぎたと言わざるを得ない。その後、昭和50年10月、同じく中央公論社から中公新書の一冊として刊行されたところの、矢野暢『「南進」の系譜』において、やっと重昂の「南進論」の歴史的役割が正当に再評価されたのである。しかしながら、現在のところでは基本的文献たる『志賀重昂全集』復刻のうわさもなく、まだその本格的な伝記も書かれていないので、重昂その人の多彩な生涯と豊かな業績の一端を知りたいと思っても、岩波文庫『日本風景論』（昭和12年1月初版）所収の小島烏水の解題もしくは先述の日本評論社版明治文化叢書本『知られざる国々』所収の土方定一の解題に依拠するしかない実状であるが、この二つの解題の内容の、いずれもすぐれたものであることをせめてもの幸いとせねばなるまい。

Ⅱ 『志賀重昂先生：濠洲夢物語』について

はじめに述べたとおり、本稿において史料として紹介するのは、志賀重昂が明治20（1887）年3月に公刊した『南洋時事』の中から抜萃されたところの、濠洲に関する数項目の評論的ないし紹介的記述である。

しかしながら、本稿における再録・紹介にあたり、その底本としたのは、重昂の原著『南洋時事』そのものではなく、それ自体がすでに後年の再編本である『志賀重昂先生：濠洲夢物語』であること、そして、本来ならば当然今回の再録・紹介にあたっては、はじめの『南洋時事』の原著か、ないしはすくなくとも『志賀重昂全集』に収録されている「南洋時事」と校合すべきところであるが、いろいろな制約的事情からしてその作業手続が果たせなかったことを、ここにおことわりしておく。

そもそも、志賀重昂その人が直接関わって編著、刊行した『濠洲夢物語』という題名の著書は、存在しないのである。ただし、たしかに重昂は「濠洲夢物語」という見出しを付した文章を書いており、それは重昂の『南洋時事』中に収められた濠洲に関わる一連の評論・紹介のプロローグにあたる一節なのである。それでは、なぜその見出しを題名に冠して、たとえ片々たる小冊子とはいえ、一篇の書物が世に公けにされたのであろうか。その間の事情ないし編纂・刊行の趣意については、同書巻頭に掲げられた「小引」が、次のように述べている。

「小 引」

本書に収録せるは志賀矧川子が、明治二十年『南洋時事』と題して公刊せられたる著書中より、濠洲に関する記事を抜萃せるものにして、「濠洲夢物語」「南方の好隣国」「日本と濠洲との貿易」「日本貿易家の参考に供すべきものあり」「濠洲列国の合縦独立せん

とする一大傾向」「濠洲の前途」の六篇なり。今ま仮に『濠洲夢物語』として前後六章に排列せり。当時を距ること凡そ六十年聊か旧に属するも、亦参考とすべきもの決して慚しとせず。想ふに我国と濠洲と、空間的には古も今も差異ある筈なきも、今日之を精神的に観れば、その距離は一躍近接せし感あり。嘗て好隣国と目せるもの、今後如何に変貌し、将来奈^{マス}辺に帰著するかは最も大なる関心事であらう。

昭和十八年一月八日 東半球協会同人記 」

すなわちこの書物は、はじめにも述べたような太平洋戦争期における日本人の対濠関心を振起さすためのジャーナリスティックな濠洲関係出版ブームの一所産にほかならない。そして、その公刊の政治的意味合いからして、一般読者にアピールすべく、篇中第一節の見出しの親しみやすいイメージから、それを便宜的に題名としたものであらう。そういえば、古来わが国においても、時代に先駆け、未来を先取りした警世・啓蒙・予言的な書物が、しばしばその真意を韜晦して「〇〇夢物語」のように「夢」の語句を題名に謳っているが、この東半球協会同人の編纂・公刊の意図もそれにつながるものがあるのであらうか。ちなみに、この東半球協会なる団体については、その性格・構成メンバー・志賀重昂との関係など、いまのところ一切明らかでない。ただ、編纂・刊行人としての東半球協会同人による『夢物語』というネーミングよりも、やはり内容としての、著者志賀重昂による「夢物語」という問題提起のパターンに、なお考えるべき点がありそうに思われるので、本稿末章ですこしふれるつもりである。

さあれ、この『志賀重昂先生：濠洲夢物語』そのものは、客観的には当時の濠洲ブームに便乗した出版物とはいえ、近代日本人の先覚的南方把握としてすでに評価の確立している志賀重昂の原著述内容を、時流迎合的に歪曲・加工せずそのまま再録していることから、同じ時期に氾濫した「きわもの」的出版物とはことなり、さすが時流を超えた「古典」的文献として、小冊子ながらその刊行の意義はそれなりに高く評価されてよからう。同書は、四六版（A 5版）、小引・目次各1ページ、本文41ページ、紙装仮綴、その奥付によれば、昭和18年1月30日発行、編輯兼発行人雑賀博愛、頒価45銭となっている。

なお、初稿脱稿後に目に触れた前田 愛「志賀重昂と日露戦争」（雑誌『伝統と現代』20号、昭和48年3月）では、重昂の日露戦観戦記『大役小志』が近代戦争の冷酷な現実へのクールな認識を欠き、戦争を「国粋の美学をかりて粉飾」したものと批判される。そして、重昂のそうした帝国主義的志向の早期的表出として『南洋時事』に言及、同書中の台湾論を取上げ「侵略主義、土地兼併主義の根拠として自然環境を援用する……一種の地政学」への展開を予示したものとし、のちその代表作『日本風景論』の包蔵するイデオロギッシュな性格につながるものと述べている。ただ、すくなくともオーストラリアに関しては、同じ『南洋時事』に収められていても、前田氏の所謂「一種の地政学」的把握の射程外にあったと見てよく、むしろそこにこそ重昂のオーストラリア認識のもつ今日的再評価の意義があるといえよう。

Ⅲ 『志賀重昂先生：濠洲夢物語』（本文）

目 次

- 第一章 濠洲夢物語
- 第二章 南方の好隣国
- 第三章 日本と濠洲との貿易
- 第四章 日本貿易家の参考に供すべきものあり
- 第五章 濠洲列国の合縦独立せんとする一大傾向
 - 第一 内因，有形無形の二大原素
 - 第二 外因，本来利害の衝突
- 結論
- 第六章 濠洲の前途

第一章 濠 洲 夢 物 語

月はビクトリヤの山頂に淡く，風はネピヤンの渡頭に冷なり．エスコバル寺の鐘声遠林を度り，四隣人定りて万籟寂然たり．矧川子独り青山の客亭にあり．一盞の麦酒陶然として酔ひ，醉魔交々薄りて復た支ふ可からず．乃ち客室を去り寝房に入りて一臥す．会ま枕上人あり潤眼大顧一目して有為の士たるを知る．矧川子を呼で曰く，頃日日本に係したる数篇の論文を「シドニー・エコー」新聞に投与したるものは夫れ孺子乎．曰く然り．曰く，咄，汝己を憚らざるものなり．然れども孺子教ふ可きもの無きに非ず．余は先きに孺子が論文を読みし日本の現状に付き悟了するところ少からず．因りて余もまた濠洲未来の大勢を説きて以て，子が労に酬ひんとす．乃ち曰く，

南洋に散在せる英国の所領地はニュー・ギニー大島の東部，フィジー群島，新西蘭，タスマニア及び濠洲大陸となす．濠洲大陸を別ちて五州となす．クインスランド，ニュー・サウス・ウェールズ，ビクトリヤ，南濠洲，西濠洲これなり．フィジー，新西蘭，タスマニアならびに濠洲大陸の五州には英国女皇陛下よりとくに1名の太守を遣して洲内の事務を総轄せしむ．然れども各植民地内一切の政務は力めて自治制を施用し，主権は各州代議院（フィジー群島，西濠洲には代議院なし）に在りて太守に在らず．太守は単に女皇を代表するまでなり．南洋各植民地の盟主をニュー・サウス・ウェールズ州（シドニー府その首都たり）及びビクトリヤ州（メルボルン府その主都たり）となす．甲は自由貿易制を施し，乙は保護貿易制を用ふ．ビクトリヤ州はその建国の期，ニュー・サウス・ウェールズ州に後るること殆んど50年なるも，今日

にては百事これと軒輊して敗を取ることに無く、特にメルボルン府の如きはその市街の状況家屋の結構等遠くシドニー府の右に出で、かつ人口もこれより多きこと7万許あり。然ればニュー・サウス・ウェールズ州はビクトリア州の繁昌を見て自から猜忌の念を生じ間々不快なることなきにしも非ず。またビクトリア州は本国と分離し自立の念あれどもニュー・サウス・ウェールズ州はその建国の期、故きをもって自から藩閥の状を為し、動もすれば本国の虎威を借りて新植民地を睥睨するものの如し。爰に又此国学士社会の間に濠洲及び植民地自立聯合の議論あり。然れども不幸にも列国の盟主とも称すべき両州が各其霸權を争ひ益々相猜忌するに到れば、此議論の実行も甚だ覚束無き次第なり。在来の経験、自然の大勢、地形、人情より謂へばビクトリア、南濠洲、西濠洲、タスマニヤ、新西蘭及びフィジーは相共に同盟聯合するも、ニュー・サウス・ウェールズ、クインスランド両州とは別離せざるべからざるものなり。然れども少しく眼を潤くして南洋の前途を慮り未来の大勢を察せば、所在の各植民地はことごとく一致聯合して共に事を協へざるべからず。宜しく北米群邦の組織に倣ひ公利の爲めに私念を棄て、先ず濠洲大陸の内部に一勝地を相して南洋聯邦の新都を創造すべし。これを万全の策となす。蓋し此各州の聯合せざる可からざる議論の近時愈々発生して益々其勢力を増殖したるは、近頃仏国の南洋諸島を経略して之に囚治檻を新設するの一事是れなり。その故は近年仏国領ニュー・カレドニア島の囚治檻内にある罪人の間々脱走して英領植民地内に到着し、所在の人家を掠奪して移住民の安寧を傷毀する事尠なからず。依りて濠洲人民は本国政府に請願するに、仏国に照会してその罪人を南洋領内に送付するを禁遏せんことを以てし、もし本国政府がこれに周旋彈力せざるに當りては、濠洲の各植民地は相聯合して、直接に仏国政府に談判し、已む無くんば兵力に訴へんとまでに激昂せし事あり。然れどもその時は幸に無事平穩に治りたるが、明治19年に到り再び濠洲人民の腦裏に非常の激動を付与したるものは、仏国の復たニュー・ヘブリズ群島を占領して新に囚治檻を設置せんとするの計画ある是れなり。然ればこの秋に當りては、濠洲の諸州はよろしく平素の私怨を去り、全州の公益安寧の爲に、之を防禦するの策を講ぜざるべからず。加之仏国が南洋所在の諸島を占領してこれに拠り、軍艦を繋ぎ製造場を建て、漸く大洋州の賈權を壟斷するが如きものあらば、是れ由々敷大事にして濠洲人民は決して枕を高くして眠むるべからず、南洋所在の「アングロ・サクソン」民族は相共同連合して、「フランコ・ラテン」民族の侵入を防禦せざる可からず。是れ濠洲各植民地の自立聯合の速度を増進する一大原因なり。然ればこの事たる固より期月の間にして能く成就すべきものに非ず。且本国政府の諸植民地を遇するや百事甚だ寛容にして毫も压制束縛杯云ふもの無ければ、濠洲人民の多数は本国と分離するを好まざるものの如し。斯くは謂へども今より五十年の後、今日濠洲にて出生したる幼童の漸く長じて50歳になり、本国の風景を見ず、本国の文物を知らず、本国の親戚朋友も漸く死絶して唯濠洲の風土のみを喜び、本国を愛慕するの觀念自ら消失するに到れば或は一大変事の其間に発生すること無きを保つべからず。今日すら濠洲の少

年は英国人と云はれんより、寧ろ濠洲人と呼ばれるを以て面目なりとなす者あり。之れを要するに濠洲諸植民地の独立は早晚已む可らざる者にして、二十世紀の歴史上に一大出来事と称すべきは、蓋し南洋の「アングロ・サクソン」民族の自立聯合して新共和国を創造するの一事ならん云々。時に予が寢室を敲く者あり、曰く、若き紳士よ、朝餐の用意既に具はれりと。乃ち驚て眼を覚せば是れ一場の夢にして旭日は高く青山の峰頂にあり。

第二章 南方の好隣国

我日本の南、南極圏の北、大陸あり、濠太利と云ふ。モーレー、マラムビッジーの両大江其間に曲折して、沖積土の沃野を成し、ブルーの連山海岸に駢行して内部を障屏し、山河壮宏、地形雄偉、誠に大業を恢弘するに足れり。顧ふに上帝当初斯の大陸を創造して、先づ木栖穴居汗尊杯飲の土蕃に賦与し、尋で旧世界の戸口漸く繁殖して庶民衣薄く食足らざるを予想し、大勢を熟考し時機を斡旋して神算を方寸の中に運らし、竟に万里の山河を挙げアングロ・サクソン民族に賜ひ、これを庇護翼賛して以て偉績を年月の後に奏せしむ、信に神算の妙固より尋常人類の能く測り知る所に非らざるなり。斯くの如く謂ひたらんには或は英国詩人の口吻に類似するが如しと雖も、若し夫れ今日シドニー府の十字街頭に立ち人事慳慳、車馬喧擾の間に筇を停めて転た百年前の旧事を回想せん乎。蓋し所在の山川は荒寒寂寥を極め、唯有加有樹ユーカリプテスの箇々乱生して、樹蔭濃き処、或は被髮跣足の蛮人が声揚げ木棍を揮ひて、幾群の長尾驢カンガルーを追逐するを觀たることならん。然るに社会自然の大勢と文明開化の氣風とは冥々の裡に磅礴して万里不毛の辺疆と雖も波及せざる處なく、其勢氣の余す處こそ此のシドニーの市街を創造したるなれ。然らば濠洲の諸聯邦が十年の間に成就せし實踐を挙げ、以て先づ読者が意見の在る所を徴せんか。

第1 人口の増殖は左の如し。

地 名	明治19年	明治9年	増加の割合
ニュー・サウス・ウェールズ	980,573	606,652	61.62
新 西 蘭	582,420	375,856	54.95
ク イ ン ス ラ ン ド	326,916	181,288	80.42
南 濠 洲	219,769	210,442	4.43
タ ス マ ニ ヤ	132,791	103,663	29.06
ビ ク ト リ ヤ	991,869	791,399	25.33
西 濠 洲	35,186	26,709	13.01
総 計	3,233,041	2,296,009	40.80

第2 人口の増加と共に植民地農耕上の進歩も亦真個に急激なるものにして、同十年間に増

殖したる耕作地の面積と畜産の数は左の如し。

(甲) 耕 作 地

地 名	明治19年	明治 9 年	増加の割合
ニュー・サウス・ウエールス	868,092 ^{エーカー}	451,139 ^{エーカー}	48.03
新 西 蘭	1,265,975	607,138	108.52
ク イ ン ス ラ ン ド	209,130	77,347	183.31
南 濠 洲	2,785,490	1,444,586	92.82
タ ス マ ニ ヤ	417,777	332,824	25.52
ビ ク ト リ ヤ	2,405,157	1,126,831	113.45
西 濠 洲	76,929	47,571	61.71
総 計	8,028,551	4,087,436	96.41

(乙) 畜 産 (此表中右側は家畜にして左側は羊の数なり)

地 名	明治19年	明治 9 年	増減の割合
ニュー・サウス・ウエールス	137,315 37,320,906	3,134,086 24,382,536	減 57.97 増 55.32
新 西 蘭	698,637 14,624,547		
ク イ ン ス ラ ン ド	4,162,653 8,994,322	1,812,576 7,227,774	増 129.65 増 24.44
南 濠 洲	389,726 6,696,406	219,240 6,179,395	増 77.76 増 8.37
タ ス マ ニ ヤ	183,641 1,648,627	118,649 1,731,723	増 16.81 減 4.80
ビ ク ト リ ヤ	1,629,076 10,681,837	1,054,598 11,749,532	増 16.81 減 4.80
西 濠 洲	70,408 1,702,719	50,416 881,861	増 39.65 増 93.08

第3 外国貿易の統計は左の如し。

地 名	明治19年	明治 9 年	増減の割合
ニュー・サウス・ウエールス	輸入 23,365,196磅 輸出 16,541,745	13,490,200磅 13,671,580	増 73.02 増 20.99
新 西 蘭	輸入 7,479,921 輸出 6,819,939	8,029,172 5,828,627	増 6.84 増 17.00
ク イ ン ス ラ ン ド	輸入 6,422,490 輸出 5,243,404	3,328,009 3,857,576	増 90.12 増 35.92
南 濠 洲	輸入 5,548,403 輸出 5,638,255	4,230,802 4,805,051	増 31.98 増 17.29
タ ス マ ニ ヤ	輸入 1,757,486 輸出 1,313,693	1,185,942 1,085,976	増 48.19 増 11.76

ビクトリヤ	輸入	18,044,604	16,685,874	増	8.14
	輸出	15,551,758	14,766,974	増	5.31
西 濠 洲	輸入	650,391	349,840	増	88.78
	輸出	446,629	391,217	増	14.18
総 計	輸入	63,268,491	47,272,839	増	33.84
	輸出	51,553,486	44,407,001	増	19.09

第4 以上の増加は誠に喜ぶべしと雖も、是に前条の如く愉快ならざる一事あり。即ち斯くの如く人口及び財本を増加せりと雖も各州共に又大に負担を重くせり。同十年間に増殖したる公債金額を左に掲ぐ可し。

地 名	明治19年	明治 9 年
ニュー・サウス・ウェールズ	総 計 1人ニ付 35,564,259磅 37磅・2志・5片	11,470,637磅 18磅・18志・5片
新 西 蘭	35,790,422 62・4・9	17,400,031 46・5・10
ク イ ン ス ラ ン ド	19,320,850 59・2・00	6,948,586 38・6・7
南 濠 洲	17,020,900 54・6・2	3,320,600 15・5・7
タ ス マ ニ ヤ	3,357,000 25・1・10	1,489,400 14・7・4
ビクトリヤ	28,628,588 28・17・3	3,992,583 17・4・00
西 濠 洲	1,288,100 36・12・2	135,000 5・1・1

第5 斯の如く公債は増殖したりと雖も、この金額は鉄道電線の如き植民地の進歩繁昌を誘致する公共の諸事業に供せしものとなり。即ち同十年間鉄道電線の延長は左の如し。

地 名	明治19年	明治 9 年	増加の増合
ニュー・サウス・ウェールズ	鉄道 電線 1,777哩 10,351	437哩	30.66
新 西 蘭	1,654 4,463	452 3,156	20.51 41.41
ク イ ン ス ラ ン ド	1,434 7,533	265 3,956	441.13 90.41
南 濠 洲	1,063 5,346	274	28,579
タ ス マ ニ ヤ	257 1,635	150 396	71.33 312.87
ビクトリヤ	1,680 3,949	617 2,629	172.28 50.20
西 濠 洲	184 2,234	38 766	384.21 191.64

第6 以上の如く公共の事業は増殖せりと雖も、這般事業はこれが為め消費せし資本の利子を償ふに足る如き歳入を生せず、為めに巨額なる租税を人民に負担せしめたり。其増加の金額は正に左の如し。

地 名		明治19年	明治 9 年
ニュー・サウス・ウエールス	歳入総額	7,587,368磅	4,121,996磅
	1人ニ付	8磅・3志・1片	6磅・18志・5片
	租税総額	2,252,651	1,138,910
	1人ニ付	2・8・5	1・17・6
新 西 蘭	歳入総額	4,093,996	2,813,928
	1人ニ付	7・4・9	7・16・10
	租税総額	2,096,212	1,350,296
	1人ニ付	3・14・1	3・11・10
ク イ ン ス ラ ン ド	歳入総額	2,840,960	1,261,464
	1人ニ付	8・18・5	7・6・4
	租税総額	1,200,111	562,227
	1人ニ付	3・15・5	3・2・0
南 濠 洲	歳入総額	2,309,592	1,143,322
	1人ニ付	7・7・6	5・10・2
	租税総額	749,447	33,103
	1人ニ付	2・7・11	1・12・3
タ ス マ ニ ヤ	歳入総額	571,397	343,676
	1人ニ付	4・6・6	3・6・2
	租税総額	366,118	207,851
	1人ニ付	2・15・5	2・0・1
ビ ク ト リ ヤ	歳入総額	6,290,361	4,236,423
	1人ニ付	6・11・0	5・5・0
	租税総額	2,548,171	1,724,822
	1人ニ付	2・13・1	2・3・7
西 濠 洲	歳入総額	323,213	157,775
	1人ニ付	9・9・9	5・19・3
	租税総額	145,835	80,645
	1人ニ付	4・5・7	3・0・5
総 計	歳入総額	24,019,887	14,078,574
	1人ニ付	7・7・7	6・2・8
	租税総額	9,358,545	5,403,845
	1人ニ付	2・17・6	2・7・1

第7 然れば鉄道及び之に類する生産的起業が充分発達したると、且充分有益となる時機に達す可き事と、又社会は之れが為めに甚だ租税の負担を増加したるも、喜んで之を払ふべき間接の利益を与へんことを記憶せざるべからず。然れども又一方に於ては這般鉄道は割合に人口の稀薄なる土地に延長したるを以て、全体より云はば直接の利益は減少したることを銘記せざるべからず。且又此に注意すべきは若し公有地払下の増加微かりせば、租税の増加は決して斯の如きに止らず、必らずや尚一層増加せしことならん。因て同十年間に払下たる土地の面積を左に挙ぐべし。

地 名	明治19年	明治 9 年	増 加 高
ニュー・サウス・ウエールス	42,087,630 ^{エーカー}	 ^{エーカー}	 ^{エーカー}
新 西 蘭	28,875,551	13,116,405	15,759,146
ク イ ン ス ラ ン ド	11,372,003	1,745,102	9,626,901
南 濠 洲	10,918,931		

タ ス マ ニ ヤ	4,463,360	4,024,808	439,052
ビ ク ト リ ヤ	22,491,462	10,351,194	12,140,268
西 濠 洲	2,125,377		

右の表は実に聯邦の一なるビクトリヤ州の統計官ヘイター氏の報告に拠るものなり。顧ふに筆者のヘイター氏其人も亦躬ら此の表を編纂するに際し、時に或は筆を停め、慨然として自国の百度進歩發達の急激なるを感嘆したる事ならん。然れども氏は親しく濠洲に在りて自国の進歩發達の行路に追隨したるものなれば、或は其感嘆の度も亦薄かる可しと雖も、これを果して他邦人ならしめば、時に或は隔世の感を為し、転た玄都城裡の桃花を再覽するの嘆あらんか。

然れば人あり更に濠洲植民地の進歩發達の状態を問ふ者あれば、予輩は明治十八年中ニュー・サウス・ウエールス州（濠洲聯邦の一なり）より蘇丹遠征の義勇兵を派遣したる一事を以てこれに答へんとす。カルツーム陥落後、英国政府撤兵の令を發布したるより、濠洲の義勇軍も亦蘇丹地方を引揚げ空しくシドニー府に帰陣せりと雖も、此一事たる植民地内の事業昌盛にして食足り人ごとに給し絆々として余裕あるを証するに足れり。シドニー府少年会宴の時酒酣に耳熱すれば、乃ち杯を挙げてニュー・サウス・ウエールスの義勇軍の歌を吟ずるを例とす。歌の訳に曰く、「葡萄熟、麦酒漉、釀出千斛又万斛」来矣薩遜快男兒、斗酒痛飲勿遲々、醉来大声彈汝劍、須唱女皇万歳詞。」一杯浣腸胃、十杯振士氣、百杯敵国慄。」雪晨龜手擁火爐、雨夜緡卷撫髭鬚、彼輩畢竟爛熟物、怯懦真個非吾徒。」況復彼輩多輕薄、落地事務豈足托、草間儉活不自恥、喇叭声到胆先落。」維遜称勇戈登誠、皆是同胞旧弟兄、偽聖可斬敵可殲、吾輩何為有不成。」汝不見伯爾之山峻嶒聳千古、又不見漢太之野豐沃称天府、吁嗟濠洲之酒濠洲兒永護女皇新疆土。」亦以て人気の如何を想ひ見る可きなり、此の人氣を以て植民地内の現状を想像せんか。

濠洲の形勢は今日にして猶斯くの如し。顧ふに今後十年、其進歩發達の状果して如何ぞや。我々日本実に濠洲を距る纔に五千海里に過ぎず、且つ其間の航路には往復共に貿易風を利用するを得べし。嗚呼天公斯の風を賜ひて以て日本人民の利用するに任ず、而してこれを用ひず、これを利せず恬として顧みざるものは恐らくは天公の本意に非ざるなり。之を要するに濠洲は誠に将来我国の物産の販売すべき一大市場にして、又南方の好隣国たる可きなり。世の志ある者濠洲の時事に注目して可なり。

第三章 日本と濠洲との貿易

「工業興すべし、物産殖すべし、日本人は冒険企業の氣慨に乏し、宜しく英米人を則る可し、我国内に資本の余裕無し、宜しく外債を起す可し、外国の資本を輸入すべし、外人の内地雜居を奨誘して以て国内の金融を滑かにす可し」とは我国人士が奨説する処なり。其議論の是非は

州 名	濠 太 刺		
	新 南 ウ ェ ー ル ス	ビ ク ト リ ヤ	ク イ ン ス ラ ン ド
位 置	濠太利大陸ノ東部ニ在テ、北クキンスランド、南ビクトリヤ州ニ界ス	新南ウェールズ州ノ南ニアリ、濠洲大陸ノ東南端ニ位セルー小州ナリ	濠洲大陸ノ東北部ニ位シ、新南ウェールズ州ノ北ニアリ、東北海ニ瀕ス
面積、人口	51,784万里 1,085,740人 沿岸ハ人口稠密ナレドモ内地ハ稀薄ナリ	14,647万里 1,111,258人 濠洲中人口最モ稠密ナル州トス	111,417万里 366,940人 近年移住民ノ来島スルモノ益多シ
地 勢	東岸ハ太平洋岸ニ面シ良港湾多シ、ブル山脈以外豊沃以內平坦礪礪	州内山岳多シ 南岸バウス海峡ニ瀕シ、良港湾ニ富ム、土味肥沃ナリ	海岸屈曲影シク随テ港湾ニ富ム、海岸ニ沿フ所山岳多シ、土味肥沃
政 体	英女皇太守ヲ派遣ス 議院ハ兩院ヨリ成リ上院ハ21名、下院ハ137名アリ 下院議員任期ハ3年ナリ	英女皇太守ヲ派遣ス 議院ハ兩院ヨリ成リ上院ハ48名、下院ハ95名アリ、下院議員任期3年ナリ	英女皇太守ヲ派遣セリ、議院ハ兩院ニ別チ上院ハ39人、下院ハ72人ヨリ成リ立法ノ事ヲ主トスル
宗教、教育	信仰ハ自由ナレドモ耶蘇新教徒多シ 教育ハ干渉ニシテ大ニ学校1個アリ	信仰ハ自由ナレドモ耶蘇新教徒多シ、教育ハ干渉ニシテ大ニ学校1個アリ	1定ノ国教ナシト雖ドモ耶蘇新教徒最多シ、教育ハ干渉ニシテ大ニ学校1個アリ
人種、人情	英吉利植民地ナリトス、人情活潑敏捷ナリト雖ドモ又タ温厚ノ風アリ	英吉利植民地ナリトス、人情活潑敏捷ニシテ且ツ甚ダ独立心ニ富メリ	英吉利植民地ナリトス、人情活潑敏捷ニシテ且ツ甚ダ独立心ニ富メリ
国 防	常備兵 492人 志願兵後備兵 5,693人 海軍総員 476人	常備兵志願兵 5,439人 軍艦数 4隻 水雷艇数 9隻	志願兵 3,500人 軍艦 2隻 国庫金ヲ以テ養フ兵士100アリ
財 政	歳入 9,382,139磅 歳出 9,264,413磅 国債 46,657,849磅	歳入 8,269,845磅 歳出 9,730,359磅 国債 37,627,382磅	歳入 3,749,000磅 歳出 3,629,814磅 国債 27,915,684磅
気候、職業	氣候温暖、ブル山脈以內ハ降雨少シ 農工牧畜採炭隆盛ナリ	氣候温和ニシテ身体ニ適ス工業発達シ農業牧羊採金等ニ従事セリ	北部ハ炎熱ナルモ南部ハ温暖ナリ 人民ハ主ニ農業砂精業ヲ営メリ
物 産 貿 易 品	物産 穀類、羊毛、石炭、凍水肉 輸出 羊毛、銅、臘類、石炭、革 輸入 製鉄、布帛類、木綿類、茶	物産 金、羊毛、牛、革、麦粉、脂肪、凍水肉等ナリ 輸入 石炭、綿、砂糖、鉄等ナリ	物産 金、錫、羊毛、凍水肉、砂糖、真珠、玉蜀黍、石炭、獸皮類 輸入 鉄、綿、粧飾品、羊毛、酒
交 通	鉄道全長 850里 馬車鉄道全長 17里 電線複線 8,887里	鉄道全長 1,080里 電線單線 1,678里 商船全数 374隻	鉄道全長 772里 電線單線 3,667里 商船全数 71隻
都邑、開港	首府シドニー(港ヲ兼ヌ) 357,856人 大港ニウカッスル 25,000人	首府メルボルン(港ヲ兼ヌ) 437,785人 太邑バララット 40,753人	首都ブリスベン(港ヲ兼ヌ) 73,649人 大邑ロッカムトン 13,212人
度 量 衡	英吉利ノ植民地ナルヲ以テ貨幣、度、量、衡ノ制度ハ		

利 亜 州		西 濠 洲		タ ス マ ニ ヤ		新 西 蘭	
南 濠 洲		西 濠 洲		タ ス マ ニ ヤ		新 西 蘭	
濠洲大陸ノ中部ヲ縦絶シ 西ハ西濠洲ニ連ル大州ナ リ、南北海ニ瀕ス		濠洲大陸ノ3分ノ1ヲ占 メ南濠洲ノ西ニアル大州 ナリ		濠洲ノ東南バックス海峡ヲ 隔テ孤立セル一島ナリト ス		濠洲大陸ノ東微南 520 里 ニ在リ、南北ノ二大島ト 一小島ヨリ成ル	
150,517方里 318,308人 北部殊ニ寂寥ニシテ南部 人口多シ		17,338方里 603,361人		4,369方里 142,478人		17,338方里 603,361人 英人ノ外、土人凡41,969 人アリ	
北アラフラ海 南印度洋 ニ瀕ス、内部ハ平坦礫确 ニシテ南部ハ肥沃ナリ		西ハ印度洋ニ瀕シ沿岸山 岳多ク内部不毛ナリ		島中山岳多ク 河 湖 亦 多 シ、風景殊ニ優美ナリ		北島ニハ火山温泉多ク岬 角四射ス、南島西部ハ大 山脈連リ水田アリ	
英女皇太守ヲ派遣シ政務 ヲ総理セシム、代議院諸 政ヲ議シ責任内閣之ヲ行 フ、上院24名、下院52名		英女皇太守ヲ派遣ス 明 治23年新憲法ヲ発布ス、 議院ハ兩院ナリ		英女皇太守ヲ派遣ス 上 院議員18名、下院36名ヲ 以テ立法ヲ主ル		英女皇太守ヲ派遣ス 議 院ハ兩院ヨリ成リ立法ノ 事ニ任ズ、上院ハ45人、 下院ハ74人ヲ以テ成ル	
信仰ハ自由ナレドモ耶蘇 新教徒多シ、教育ハ干渉 ニシテ大学校1個アリ		耶蘇新教最トモ行ハル、 教育ハ干渉主義ヲ取ル		新教ヲ奉ズルモノ多シ、 教育費37,593磅		耶蘇新教最モ多ク行ハ ル、初等教育ハ政府大校 干渉ス大学1アリ	
英吉利植民地ナリトス、 人情活潑敏捷ニシテ且ツ 甚ダ独立心ニ富メリ		英吉利植民地ナリトス、 人情活潑敏捷ナリトス		英吉利植民地ナリトス、 女子ノ節操堅固ナラズ		英吉利植民地ナリトス、 人情活潑敏捷進ンデ為ス 所有ルノ風アリトス	
陸軍総員 2,735人 アデレード港頭ニ2砲台 ヲ設ケ港内ニ軍艦繫ギ緩 急ニ備フ		海軍常備兵ナク義勇兵 493人アリ、之ニ付スル 歳費3,508磅也		常備兵 25人 義勇兵 800人		常備兵 141人 志願兵 10,132人 国防及警察費 157,855磅	
歳 入 2,485,420磅 歳 出 2,430,859磅 国 債 20,685,500磅		歳 入 357,003磅 歳 出 385,129磅		歳 入 717,255磅 歳 出 705,593磅		歳 入 4,055,033磅 歳 出 3,977,265磅 国 債 36,971,771磅	
北部内部ハ殊ニ炎熱 内部 ハ温和ナリ 農耕、牧畜、採銅盛ンナ リ		北部内部ハ炎熱 南部ハ 温和ナリ、農業ヲ主トス		氣候温和南半球ノ健康所 トス、 人民農ヲカム		温和ニシテ身体ニ適ス、 降雨適量ナリ 人民ハ農牧ヲ主トナス	
物産 小麦、葡萄酒、馬、 羊、銅、銀、諸製 造物 輸出 銅、羊毛、麦粉 輸入 鉄、織物類、綿類		物産 羊毛、真珠、香檀 木、木材 輸入 酒類、鉄、綿、器 械、獸皮		物産 羊毛、金、穀物、 獸皮、果物、律芋 輸入 鉄、綿、器械類		物産 羊毛、金、穀類、 麦粉、凍氷肉、松 材、石炭、護謨、 獸皮類 輸入 鉄、毛織物、綿、 粧飾品等	
鉄道全長 730里 電線全長 6,783里 商船全数 312隻		鉄道全長 106里 電線単線 954里		鉄道全長 131里 電線単線 758里		鉄道全長 746里 電線単線 1,997里 商船全数 412隻	
首都アデレイド 120,000人 大邑ムーント 5,000人 大港アデレイド 4,000人		首都パース 10,000人 大港フリーマントル 4,000人		首都ホバート(港ヲ兼ヌ) 28,648人		首都ウエリントン (港ヲ兼ヌ) 27,833人 大港オークランド 57,048人	

悉ク英吉利ノ制度ヲ用フルモノトス

予輩の与り知らざる 処なりと雖も、仮りに我国万般の事物を悉く 這般志士が 意の如くならしめ、毫も不満不足無き境遇に到りたるものと想像して、資本は日本国内に充実し、各種の工業は日に月に興り諸般の物産は海の如くに盈ち山の如くに堆きも、これを消費しこれを販売するの好市場無ければ真に宝の持ち腐れにして所謂黄梁嚙に 盈つれども用無ければ納めざるに等しきものと云ふ可し。今日我国の風潮は漸次興業殖産の一途に帰する傾向あれば、数年を出でずして国内に工業生産の興起するは期して待つべきものなり。然れば今日より予め後図をして周ねく各国を通覧して其俗を察し風を観て、箇々の嗜好を査し人々の需用を考へ、以て他日の為に広く新販路を世界に求むるは敢て大早計と云ふ可らず。其事の肝要なること、猶今日陸海軍参謀の諸士が各国の兵勢、地形、人情等を視察するに等しきなり。將た又今日只今と雖も我国の物産を新に消費販売すべき好市場あれば、敢て他日を待たず直ちにこれに手を着け、盛んに通商貿易を試む可きは理の当然にして、予輩が嚅々を待たざることならん。

我日本の東隣を米国となし、西は支那、北は露領浦潮斯德地方にして、南隣を濠太利洲（濠洲並に新西蘭）となす。東西北の三隣国は夙に吾国人の通商貿易する処にして、公私の交際往来も亦頻繁なりと雖も、独り南隣の濠洲に限り今日に至るまで未だ毫も我国人の注意を惹かざるは、実に不可思議の至りなりと云ふ可し。今日の濠洲は五年前の濠洲に非らず、今日の濠洲も亦後年パナマ運河若くはニカラガ運河落成後の濠洲に非ざるべし。其進歩發達の速かなるは尋常思想力の外に出で、真に駟馬も及ばざる有様なり。人口は300万に余り、20万人以上の都会2個、1万人以上の都会10余個を以て数へ、鉄道路の延長は業に既に5,000英里を超えたり。其人民を問へば敢て剛毅の氣象を以て名を博したる「アングロサクソン」民族中の最も敢て剛毅なる者の団結したる処なり。斯く文明開化の一邦国が近く我が南隣に在るにも拘はらず、予輩が今日まで之と交通往来せざりしは真に解す可からざる次第なり。尤も我国の物産と雖も濠洲の市場に販売を試みたる事無きに非ず。即ちシドニー府のハイド公園に到れば、日本人種中にて最下等の模本とも称すべき人類39名の出品あり。即ち乞食芝居の役者、喰詰めたる茶屋女、傀儡師、芸妓、破落戸等にして、所謂日本村落の材料をなすものなり。其他二三有為の日本商人ありと雖も、此の輩は明治19年3・4月の頃シドニー府に到着したるものにして、「グラント・ホテル」の三層樓に宿泊して、時々些少の取引を試むる者に過ぎず。予輩の希望する処は斯くの如き規模の偏少なるものに非ず、我国有為の資本家が団結して大に為す処あらん事を切望するものなり。

我日本より濠洲に到る海上は風波殊に静穏にして所謂太平洋の名に負かず、煙波5,300英里、帆走船の早きものは35日、長きも50日を出ずして濠洲に達すべし。其順路を記さんに、先ず碇を横浜に抜き帆を揚げて東南に航駛すること数日にして、東北貿易風の区域に入る。此区域に入れば風位甚だ変更せず、恒に一定の方向より吹来り、天象の変化錯乱も亦渺きを以て、随て労を用ひ力を要する事も少なし。斯くて数日を経過し赤道線を横過して南半球に入り、漸く進

みて南緯五度の処に到れば内中外の三航路あり、尋常の帆走船なれば中航を取るも敢て危険の患無しとす。此航路はビスマルク群島の間を航駛するものにして（ビスマルク群島は、輿地図上にソロモン群島と記載する処なり。去年5月、独逸国占領以来今の名に改称したるものなり。此航路は先年我国帆走船謙信丸が月夜に経過せし事ありしが、絶えて危険の憂無かりしと云ふ。）此れより東南貿易風の区域に入り旬日ならずして濠洲の連山を右舷に認め、これに沿ひ航駛する事一兩日にして旭日の旗章を翻してシドニー港に入り碇を投ずれば、其日の毎夕新聞は早くもこれを探訪して直ちに其紙上に登録し、嘖々として日本人の冒険大胆なるを称揚するらん。且近時濠洲人民は日本人の敏捷にして清廉なるを欽賞して措かざる処なれば、我船舶の携帯したる貨物は直ちに売れ尽して復た余す処なきに至るべし。

此の帆走船が携帯すべきものは如何なる物品なるべきやと謂ふに、先ず濠洲人が食卓に供する印度米は濃膠にして風味宜しからずとの評あれば、宜しく此機を外さず濃淡相和して佳味なる日本米を持ち往くべし。（但し器械搗き米に限る）濠洲の人民は富豪にして且女子の衣服を裝飾すること男子よりも甚しければ、宜しく我絹布縮緬地を送るべし。（愛蘭の婦女が炊婢となれば、本国にて一箇年の給料50弗、英国にては57弗なれども、濠洲にては180弗を受く、故にシドニー辺にては下婢に至るまで甚だ裕富なり）陶器、漆器、生漆、生蠟、樟腦、皆妙なり。日本製の麦藁帽子は閑雅なりとて、近時西洋人の好評を得たれば此れも送るべし。国製の摺付木、石鹼、洋灯のほや等は其価廉なれば、其製造にして果して精良なりせば、必らずや濠洲の市場上に於て他国製のものと競争するも敢て敗を取る事無かるべし。其他扇子、団扇、紙製の日傘、小間物類にして所謂ファンシキグーズと総称する雜貨を携載すべし。唯此般の諸貨物を携載するに一事の注意すべきものは、我国より濠洲に到らんには南北温熱の四帯を経過せざる可からず。随て氣候の変化殊に甚だしきを以て、之が保存に気を付けざる可らざる事なり。其保存にして間然する処なく、品質にして精良なりせば、我国にて至廉の労力を以て製造したる品物を労力の賃銀七倍するの市場に販売する事なれば、其赢利決して尠少ならざるを信ずるなり。

偕又此帆走船の帰航するに當り、濠洲より荷積みして我国に携帯すべき物は羊毛、毛糸、石炭等なり。濠洲羊毛の廉価にして且纖維の精緻なるは世の知る処にして、英米国産のものに比し非らず。我国にても近事漸く毛織物絨氈等の製造事業興起したれば、羊毛需用も亦尠なからざる可しと信ずるなり。又濠洲ニュー・カッスル地方の石炭は一噸に付最上等十一志（我金貨2円75銭）なれども、尋常商売上の取引にては九志四片（我金貨2円33銭3厘）にて容易に購求するを得べし。今ま之を我国まで積来る雜費を一噸に付1円と見積りするも、都合3円33銭3厘なり。然るに我国にて唐津、高島、幌内等の石炭は一噸67円の間にして如何なる場合に到るも5円30銭より廉価なる事なし。即ち石炭のみにても、其赢利あること歴々鏡に懸けて見るが如し。（此事は先年謙信丸が濠洲石炭を積み帰りて利益を得たることにても知るべし）蓋し

東北、東南の両貿易風を往復共に利用し得るものは、独り日本と濠洲の航路のみなり。嗚呼天此の風を降して我国人の利用するに任ず、而して我国人が今日迄これを用ひず、これを利せず恬として顧みざるものは、独り貿易上の愚人のみに非ず、亦天の罪人なりと云ふ可し。斯くて我船舶の往く可きものあれば彼れも亦来り、彼此の事情を相通じ公私の往来も亦頻繁なるに至らば、其利益関係の及ばす所独り貿易上のみに非ざるなり。

濠洲人民は近時に到り遽かに日本国に注意するに至りたるが如し。昨19年以來濠洲並に新西蘭の新聞紙上には嘖々として我国の現情を論説し、日本は我が善隣国なり、日本国内に濠洲羊毛の新販売市場を求む可しと唱ふるもの比々相踵ぎ、遂に19年4月下旬メルボルン府紳商の大会議となり、先づ自ら75,000磅を醸し、日本の商人より25,000磅を出さしめ都合100,000磅を資本とし、濠洲の羊毛を日本に販売し、且日本国内に1箇の羅紗製造所を新設せんと議起り、同府滞在日本名誉領事マークス氏の如きも現に其會議に列したりとか聞きぬ。メルボルン府とシドニー府とは相互に其繁昌を競争する折からなれば、メルボルン府民の企画を聞きてはシドニー府民も亦恬として是れを坐視せず、必らず進んで我国との通商を企図する事ならん。蓋し濠洲人民の日本国に注意するは今日より甚しきは無し。嗚呼吾国有為の人士は何んぞ進みて此好機会に投ぜざる。

第四章 日本貿易家の参考に供すべきものあり

予嘗て濠洲の洋上詩あり、曰く目断蒼溟万里秋、天辺那処是濠洲、何来孤鶯松雲起、皎月影高南半球と、時に去歲3月中旬也。又濠洲の客中詩あり馬車声歇路西東、製鉄樓頭月似弓、三月濠洲秋色冷、滿天風露聽吟蟲と。蓋し我国に於ては3月中旬は実に陽春清明の季節にして千紫万紅の時気なり、故に万里秋とか三月秋色冷なりとか味ずるは妥当ならずとの評もあらん。然れども北半球と南半球とは四季全く顛倒して、日本の春は濠洲の秋なり、彼が夏は我が冬なり。然れども北半球に生れ北半球に長じたるものは或はこれを知了せず、世界中到る処3月は千紫万紅の季節にして、9月は黄葉紅楓の時気なりと自得するものならん。然れば若し夫れ秋風三月濠洲路、人往紅楓黄葉中と記し、これが斧正を先生に乞はば、先生は鑿鑿鏡を把り一見して忽ち咄々と呼び轍ち朱を研し筆を採り「春風三月濠洲路、人往万紅千紫中」と刪正さることならん。斯くの如くなれば北半球の詩人墨客の脳中には、濠洲の詩人ケンドールが彼の“Now the sultry December comes”（溽暑なる十二月来れり矣）の長歌の妙味は蓋し悟了す可からざるものならん。然れども斯は單に詩人墨客の閑事にして、世の実利実益の関繫無きものなれば、予輩は毫もこれに嘵々論議する処無しと雖も、是れ真個に我国の貿易家が注意す可き一事なり。何んとなれば我れが夏は彼れが冬なり。故に日本に於ては驕陽三伏の季節なりと雖も、濠洲にては正に是れ南風凜冽として肌膚粟を生じ寒威人を侵かすの時気なり。此時に当

りて幾多の士女は団扇として煖爐を擁し櫓柱を煨き、且新聞紙を閱みすに紙上会ま雜報あり、曰く日本の帆走船は団扇、扇子、紙製の日傘等を携載してシドニーの海門に寄着したりと。然れども此の玄雲凝結の季節に際し誰れか這般避暑納涼の具を顧みるものあらんや、日本製の麦藁帽子は近時如何に泰西人士の好評を博したりとて、此れを購求するものあらんや。然れば日本の船舶は荏苒として海門に碇を投じ、乗組の人士は甲板上に躊躇して各眉を顰め、日に需用者の眊きを憂慮するものの如し。是に於てか彼国一二の投機者は早くもこれを推察し、至廉の価値を以て這般物品の購求を申込むならんか。顧ふに我が商人は当初意気雲を凌ぎ巨利手に唾して博す可しとなし、6国の金印を連帶して国に帰り同人の間に誇揚せんとしたるも、是に於てか初めて需用者の眊き理由を悟了し、憮然自失して竟に彼の投機者が謂ふ処に曲從する乎の珍事もあらんか。若し然らずして頑然これを持ち対へんとするも、如何せん我は天涯万里の行客にして、彼れは此地に永住するものなり。彼れは低利の資本を仕用するものにして、我は其利子彼れに3倍するの資本を流用するものなり。我は労力の賃銀7倍するの邦国に來りて衣食の費用甚だ巨額なるを如何せん。然れば此時に當り万已む可からずと雖も曲げて彼が意に従はんよりは、復た他策無かる可き乎。彼れ一度これを博し得たれば必らずやこれを倉庫に儲藏して耶蘇降誕節(12月25日)の時節を待つものならん。会ま耶蘇降誕節の10日前新聞紙を閱みすに広告あり、「クリスマス・プレゼント」(耶蘇降誕節の贈物にして猶我が年暮の寄贈品若くは年玉の如きもの)の需用に應ず可き日本直輸入の団扇扇子、日傘、麦藁帽子等ありと。図るに此時は恰も祝融令を司り炎帝天を経し風北薰を奏するの季節なるを以て、這般物品は悉く售罄しして復た余す処無きに到る可し。嗚呼我は喪ひて彼は得つ、一は限り無きの艱難を冒して毫厘も得る処無く、一は手に唾して易々巨万の大利を博す。其差実到天壤も霄ならずと云ふ可し。然れども其果して因る処を稽查すれば、職として我が無暴無識に是れ由らざるものなし。嗚呼是に於てか復た誰れをか咎めんや。

以上季節の顛倒に就き尚謂ふ可きものあり。顧ふに異日日本と濠洲との間に貿易愈々頻繁となり、彼此の通商益々旺盛となれば、尋常利益の外に尚一箇の利益あり。元來我日本に於て夏物を製造するものは冬中其需用無きを以て他の職業に轉換し、又冬物を製造するものも、亦夏中其需用無きを以て他の職業に轉換するを例とせり。是が猶氷屋が冬中牛肉屋と転じ、又冬中焼薯を以て業とせしものが夏中水菓子屋と換はるが如し。然れども若し這般夏物を製造するものをして冬中同じく其業を守らしめ、又冬物を製造するものをして夏中同じく其職に就かしめ始終転職換業等の事無からしめば、此輩に取りては其利益すること蓋し眊少には非らざる可し。第1には其転職換業する毎に多少の費用と時間と労力とを要し、又夫々の新器具を備へ付けざる可からず。然れども転職換業の事無ければ、這般の諸件を要せずして可なり。第2には転職換業すること無く始終其職に就かしめ業を守らしめば、其技芸も亦進暢上達す可し。以上生産者に取りての利益なり。然るに夏物を冬中に製造せしめば、其価も亦隨て廉なる可く、且

貿易風の区域に入れば、風位甚だ変更せず、毎に一定の方向、一定の速力を以て、吹き来るを以て随て牛手の勞を用ひ力を要することも甚だ尠し。然ればこれを帆走船にせば危険の憂慮特に尠く、且船の進力甚だ迅速なり。是れを補蒸氣船にせば其間蒸氣罐の運転を中止するも可なり、故に石炭の使用に莫大の減少の利得あり。是れを蒸氣船にせば其の間蒸氣力を緩め総帆を張る風力を以て汽力を補ふも可なり。これ亦石炭の使用に莫大の減少利得ある可し。然れども良し蒸氣汽罐を緩めざればとて帆力を以てこれを補へば汽風の兩力の為めに船の進度は特に迅速なることならん。然れば航海の時間も随て減少し、随て石炭の使用も減少するものと知る可し。

(第5) 日本濠洲の季節顛倒するより、生産者需要者共に各自の利益あり。予輩は業に既にこれを詳かに論説したれば今これを略す。

(第6) 日本と濠洲との貿易を大に啓く可き時機は業に既に到達したるものなり。メルボルン府紳商の大会議云々に付きては、予輩これを前章に登記したり。

(第7) 日本社会にては近時羅紗、毛織物を着衣すること甚だ流行し、竟には下等社会も亦漸くこれを着衣することならん。然れば今日にして濠洲の羊毛を輸入し、我国人が至廉の勞力と、余りある石炭の供給を以て盛んに製絨の事業を興起すれば其利益尠少に非らざる可し。

(第8) 濠洲主要の物産即ち縞ケット(所謂アウストレリアン・ブランケット)は英国産のものに比すれば其価遙かに廉少なるを以てこれを我国に輸入せば其需用も亦少からざる可し。

(第9) 濠洲主要の物産たる毛糸を我国に輸入し、一般社会の婦女子が是を以て喫煙帽子、靴足袋、下襦袢、襟巻、肩掛け、腹巻、帶止、手袋、腕嵌、敷物、肱衝、涎掛け、巾着、守札袋、ランプ敷き等を製作して漸次手内職とせば、其直接間接の利益尠からざる可し。

(第10) 彼此の往来船舶の出入甚だ頻繁となり、自他の事情に相通ずるに到れば、其利益関係の及ばず処独り貿易上のみに非ざるなり。

濠洲貿易の贏利あるは既に斯くの如し。我国有為の資本家は何ぞ自から奮ひて其局に當らざる。日本の読書家動もすれば輒ち曰ふ、日本人は忍耐頑造の天稟に乏しと。嗚呼這般無氣無腸の読書家、学士の謂ふ処果して何にかある。日本人の短所は冒險企業の氣概に乏き也、勇往断行の精神無きものなり。嗚呼歲月人を待たず光陰飛んで矢の如し、人生五十二毛漸く鬢辺に上らんとす。醉生夢死の面目ありて後世子孫に見へん。咄々君子宜しく危に近づく可し。日本男兒請ふ何ぞ万丈の光焰を吐かざる。

第五章 濠洲列国の合縦独立せんとする一大傾向

第1 内因 有形無形の二大原素

「植民地は一大邦国を化成する卵子なり」とは二千載の上、希臘の名儒プレートーの格言なり

と記憶す。誠に然り、植民地は猶ほ童子の如し。其初め父に寄り母に寄り兄に寄れるも、漸くにして物心を生じ、少壯年となりて自己の見識を立て、知らず識らず特立特行の觀念を開発す。此觀念にして愈々開発すれば、1人にしては1人前の男子となり、植民地にして1個の邦国を創立す。濠洲列国の合縦独立せんとするの一大傾向あるも、亦実に此処に起因せり。

濠洲列国は近世期の間に植民されたるものなり。然れども其有形無形共に進歩改良の迅速なる、他の民族をして後に瞠若たらしむるものあり。今より101年前、即ち1,788年、英人の初めてボタニー湾近傍に移住せしより、今日に到るまでの人口増殖は左の如し。

年 度	人 口
1788年 (101年前)	1,000
1835年 (54年前)	80,000
1851年 (38年前)	350,000
1876年 (即明治9年)	2,296,009
1886年 (明治19年)	3,233,041
1887年 (明治20年)	3,486,682
1889年 (本年の予算)	4,067,000

斯の如くアングロ・サクソン民族は南半球裡に増殖しつつ、竟に濠洲の全人口は次世紀の間に1億万人ともなるべき予算なりと。実に驚くべき速力と云はずや。独り全洲人口の増殖のみならず、彼等は一百年間にシドニーなる人口28万の都会と、50余年間にメルボルンなる人口39万の都会を創設したり。殆んど天魔の仕業と云ふべし。

独り人口の増殖のみならず、富の増殖も亦余りと云へば甚しと妬むの外なかるべし。

富	明治9年 エーカー	明治19年 エーカー	増加の割合
耕 地	4,087・436	8,028・551	96.41
綿 羊	60,000,000頭	81,000,000頭	35.00
輸 入	236,364,195円	316,342,455円	33.84
輸 出	222,035,005円	257,767,430円	16.09
鉄 道	2,233哩	8,050哩	260.50
電 線		35,511哩	

予輩は濠洲植民地の殷富なる証左として、彼等が購買力を欧米の大国并に日本の人民と比較せんとす。即ち明治19年に於ける各国人民の購買力は正に左の如し。

濠 洲	177.58円
英 吉 利	84.16
仏 蘭 西	49.33
日 耳 曼	31.90

合 衆 国	31.60円
以 太 利	16.55
魯 西 亜	9.26
日 本	2.10

上記統計によれば濠洲人民の購買力は英人に2倍強し、仏人に3倍半強し、独逸人、米人に5倍半強し、以太利人に11倍強し、魯西亜人に殆んど20倍し、予輩日本人に84倍半せり。何ぞ夫れ盛んなるや。

濠洲植民の実力既に斯くの如し。これを1人に譬ふるに猶ほ少壯の漸く自己の見識を立て、知らず識らず特立特行の觀念を開発するものに似たり。濠洲の植民実力を蓄積して自から一見識を立て、之れと共に所在万般なる罔外物は彼等の間に漸く一種特種なる国粹を發達せしめ、此国粹愈々發達して本国の事物と愈々相隔離し、本国の利害と愈々相衝突す。此の国粹や一起して“**Australia for the Australians**”（「濠太利は濠太利人の濠太利たらざるべからず」と云ふ義なり）の喊声となり、再起して、“**National Party**”（独立党）の団結となり、三起して濠洲列国の合縦独立となる。是れ濠洲植民進化の次第なり。彼等の合縦独立せんとするは時なり、勢なり。豈に佐しむに足らんや。此時に当り地位名望自から独立党の首領となり、彼等の間に一大勢力を逞用し、隠然猛然濠洲独立の氣運を煽揺するものをクインスランド州の前首相サー・トーマス・マックイルレイス氏（**Sir Thomas MacIlwraith**）にして予輩は氏の名を聞くこと茲に久し。而して客月中旬の郵便報知新聞紙上に氏が日本に來遊したるの雜報を認めたり。聞く氏は現に横浜のグランド・ホテルに滞在せりと。サー・トーマス・マックイルレイス氏は夙に濠洲独立旨義を懷抱し、進んで其志業を成就せんとし、初めて“**Australia for the Australians**”の喊声を揚げ、「濠洲海防案」は本国英吉利の爲めに順便なるも、濠洲人民の利益にあらずと告白し、以て同志を全大陸に求めたり。ここに於てか彼の南十字架星^{サウザークロス}を眺め、有加利樹蔭^{ユーカリプタス}に逍遙し、本国の山川を知らず、北半球の風物を夢寐せざる純然たる濠洲男子は、各々先を争ひて氏が志業を賛成したり。独り此輩のみならず、好險なる者、好奇なる者、不平なる者、游俠なる者、雷同したる者、壯士的なる者、想像的の感情に富む者、正義を受する者、遠識なる者、時運を看破したるもの、相率ひて氏が許に集ひたり。州人乃ち此輩を目して“**National Party**”（独立党）と称呼しけるに、此輩も亦喜んで「独立党」と自号し、「繁榮」「平和」「豊満」「非海防案」「非本國党」「國家獨立」てふ措辞をマックイルレイス氏の姓名上に冠せしめ、氏を頌賛し、氏を推戴し、以て、其旨義の相反對せる「本國党」（“**Imperialistie**”と称号し、サー・サムエル・グリッフィス氏これが首領たり）を痛撃したりき。想ひ見る一帯のブリスベン河は瑩然としてブリスベン城（クインスランド州の首都なり）を繞り流れ、涼秋五月（明治廿一年）白露江面に横はり、万象凜冽千里澄空なる處、仰ぎてハルトン・クロスの山勢を望めば、自から内部を障屏するものの如く、沖積土の沃野は其麓に延縁して、山河襟帶、地形雄偉、自ら

濠洲少年をして新独立国創建の感情を激昂せしむる折しも、長身肥大のマックイルレイス氏が慨然として濠洲列国独立の大義を万衆の間に告白したる状況を、聞く今日に当り氏の志業を賛助し、公然独立党に加入署名せしもの業に既に3,000人に余れりと。

独立旨義の気焔は独りクインスランド州のみに止らず、炎々として四隣に迸り、ニュー・サウス・ウェールズ州に及び、南濠洲に及び、竟に1,300 海里的煙波上を走行して新西蘭にすら及びたり。知らずや、ニュー・サウス・ウェールズ州は濠洲聯邦中最も長老なる植民地なるを以て、自から藩閥の状をなし、最も本国に忠義なるものなることを。知らずや明治18年中濠洲聯邦は各々蘇丹遠征の義勇軍を編成し、偽聖征伐に出陣せんとて本国政府に請願しけるに、本国政府は夙にニュー・サウス・ウェールズ州の忠義なるを知悉するを以て、特に独り該州の義勇軍のみ蘇丹出征の請願を認許せしことを。然り而して図らざりき斯の最忠義なるニュー・サウス・ウェールズ州に於てすら猶ほ且つ **“Australian National Association”** (濠洲独立協会) なるものを組織したるあらんとは、図らざりき而かも其首都シドニーに於てすら、猶ほ且つ知名の一紳士が「濠洲各植民地の合縦連盟と本国よりの分離とは早晚已むべからざることを確信するものなり。故に今日に在りて広く人々に這般の理由を知了せしむるは無益の事業にあらず」と公然演説したりきとは、独りクインスランド州の独立党、ニュー・サウス・ウェールズ州の濠洲独立協会のみならず、亦夙に **“Australian Natives' Association”** (濠洲藩民協会) でふ強盛なる非本国旨義の一团結あり。聞説らく、此一会員は去る宴会の席上に於て、本国女皇陛下の万歳を慶賀せんことを拒絶し、併せて濠洲人民が本国より分離するの緊急なるを昂然告白したりと、ニュー・サウス・ウェールズ州既に斯くの如し。而してビクトリヤ州は最も非本国旨義に名あり。予輩は今猶ほ記憶す、会まパラマッタ河行の小汽船上、メルボルン府大学(ビクトリヤ州の首都)の学生3名と共にしたる際、彼等の陳述したる活快なる談話を、曰く「我々は本国より派遣されたる太守に一万磅の年俸を仕給せざるべからず、実に不平不経済にあらずや。我々は濠洲人なり、如何ぞ英吉利より派遣されたる官吏に高額なる報酬を仕給するの理あらんや」と。以てビクトリヤ州人が思想の一斑を窺ひ知るべし。然り而して南濠洲に於ける非本国旨義も亦極めて大なる勢力を保有し、現に客臘同州植民政府は本国政府に照会するに「本国政府より当州へ太守を派遣被致候節は右任命前予め其姓名を御通知可被下候」との義を以てしたり。即ち其含意たる「然らば此方に於て右太守候補者の人物を精々取調可申候。万一面白からざる御仁にも候はば遠慮なく御断り可申候」と隠然本国政府の処置を軽侮しつつある者なり。太守候補者の予知を本国政府に照会したる者は独り南濠洲のみならず、実に昨年11月8日、本国政府のサー・ヘンリー・ブレーク氏をクインスランド州太守に任命するや同州植民政府は即日電信を以て復命して曰く「サー・ヘンリー・ブレーク氏ノ任命ヲ聞キ喫驚セリ且ツ憤怒セリ……氏が在来ノ履歴ヨリ見レバ氏ハ当州ノ如キ責任政府ノ存在スル植民地ヲ管理スルニ不適当ナル者ト信ズ」と。誠に傲慢不礼なる復命と云ふべし。彼れと云ひ此れと云ひ亦以

て独立旨義の気焔を徴知すべし。然り而して其起因する処実に濠洲植民が有形上の実力を蓄積したると、無形上一種特殊なる国粋を發達したる二大元素に在り。真個に国粋の發達は民族独立の觀念が發達と両々相并行するの証左となすに足れり、之れを要するに濠洲列国の合縱独立せんとするは、植民進化の原則に順適す。故に正大なり、公明なり、上帝化育の聖旨なり。之れを掣せんとするも豈に得んや。之を沈滅せんとするも豈に得んや。嗚呼マックイルレイス氏或は死すべし。独立党或は亡ぶべし。誰れか知らん極天極地死すべからず亡ぶべからざる進化てふ一大原則あらんとは。仮令ブリスベンの水をして帶の如く、ハルトン・クロスの山をして砺の如くならしむるも、濠洲独立の大旨義は綿々として竟に断期なけん。進化の神は汝輩を呵護せり。往矣、南隣の好兄弟よ。

第 2 外因 本末利害の衝突

濠洲所在の植民が有形上の実力を蓄積したると、無形上一種特殊なる国粋を發達したるとは、是れ彼等の間に独立旨義の生長を促致したる二大内因なり。然れども亦這般の別、尚ほ独立旨義の勢力を愈々助長する一大外因の在るあり。其者如何。曰く本末利害の衝突是れなり。借問す本末利害の衝突とは何にぞ。曰く本国英吉利が外交上の治安を保維せん為、南洋の利益を犠牲にする即ち是れなり。

予輩は記憶す、明治16年の頃、ニューカレドニヤ島囚治檻云々に関し濠洲列国が激昂憤懣したる一出来事を。其故たる近年仏蘭西領ニューカレドニヤ（南洋に在る大島にして濠太利大陸併に新西蘭に近し）の囚治檻内に在る罪人の間々脱走して英領植民地内に到着し、所在の人家を掠奪して移住民の安寧を傷毀すること尠なからず。依りて濠洲人民は相合縦して本国政府に請願するに、仏国に照会して其罪人を南洋領内に送付するを禁遏せんことを以てし、若し夫れ本国政府がこれに周旋彈力せざるに当りては濠洲の各植民地は相聯合して直接に仏国政府に談判し、已むなくんば兵力に訴へんとまでに激昂せしことあり。然れども此時は幸に無事平穩に治りたるが、同19年5月に到り再び濠洲人民の腦裡に非常の刺激を付与したるものは、仏国の復たニュー・ヘブリズ群島を占領して新に囚治檻を設置せんとするの計画ありしこと則ち是なり。想ふに此秋に当りては濠洲の諸州は全植民地の公益安寧の為めに、相合縦連盟して之を防禦するの長策を講究せざるべからず。加之ならず仏国が南洋所在の諸島を占領して、これに抛り、軍艦を繋ぎ製造場を建設し、漸く大洋州の賈権を左右するが如きものあれば、是れ由々敷大事にして、濠洲人民は決して枕を高くして眠むるべからず。南洋所在のアングロ・サクソン民族は相共同連盟してフランコ・ラテン民族の進入を防禦せざるべからず。是れ濠洲列国が合縦独立の速力を増進する一外因なり。然れども本国政府にして濠洲人民の利害を審査対照し、これが為めには飽くまでも周旋彈力することとせば、濠洲人民も亦本国の厚情に感佩し、合縦独立の速力も自から遅緩なるべきことなるも、一昨年の秋、米国華盛頓府に於てサモア事件に関し英独米3国の使臣協議の際、英国委員サー・ジェー・ビー・サーストン氏（英領フィ

ジー島の太守兼西太平洋委員長にして、予輩はフィジー群島なるヴィチーレーブ島のスヴ府政庁に於て氏に一面したる事あり）が本国政府の訓令に因り、一步を独逸に譲り、暗々裡に独逸人の所業を認可したるが如きは、即ち本国英吉利が外交上の治安を保維せん為め、濠洲新西蘭人民の利益を犠牲にしたるものにして、是れ所在植民の不平なる所なり。是れ所在植民の合縦独立の気焰を助長する一大外因たり。

サモア事件とは何んぞや、独逸が太平洋貿易の中心販売市場たるサモア群島を占領せんとし、商社を設け、土地を購ひ、軍艦を繋ぎ、僭王タマセセを教唆して正王マリエトアに叛せしめ、竟に正王を敗り、正王を廃し、正王を流竄し、其雙鷲の国旗をサモア政庁の上に飄し、傍若無人乱暴狼藉なる活劇を演出したる顛末即ち是れなり。若し夫れサモア群島をして独逸人の掌中に歸せしめんか。独逸は即ち大洋州貿易の中心市場を占領したるものなり。濠洲特に新西蘭は同群島と迹近し、海上僅かに5日程なるを以て、新西蘭人民の利害に相干涉すること尠ならず。況んや新西蘭が大洋州諸島の盟主たらんことを期し、同洲第一流の名士、前太守サー・ジョージ・グレー氏（80歳許りの老人なり）の如き、第一流の政治家ジュリヤス・ヴォーゲル氏（現時の財務長官）の如きは夙に南太平洋諸島兼併策を鋭意主張するものあるをや。然り而して植民地の与論等しく諸島兼併策（Imperial Extension）を奨説するにも係はらず、太平洋貿易の買權を拡張せんことを鋭意周旋するにも係はらず、本国政府は之を知悉しながら只管外交上の治安の為めに、南洋の利益を犠牲にし、埃及事件に関し独逸人の歛心を害はんことを慮り、故さらにサモア事件には一步を鉄血宰相の意見に譲りたり。即ち本国は「本国に迹近なる邦国の事件」の為めに、南洋の利益を犠牲にしたるものなり。即ち本国と濠洲植民との利害は相衝突するものなり、相背馳するものなり。既に本国と植民地との利害にして相衝突背馳せば、如何に分離せざらんとするも、如何に独立せざらんとするも、豈に夫れ得べけんや。本西を利とすれば末東を利とす。是れ本国と濠洲植民との関係が其現状なり。独りサモア事件のみならず、ニュー・ギニー大島の分割論に付きても英吉利は故さらに一步を独逸に譲与せりと云へり。濠洲人民の憤悶する道理なしとせざるなり。之を要するに濠洲諸植民地の独立は早晚已むべからざるものにして、20世紀の歴史上に一大出来事と称すべきは、蓋し南洋所在のアングロ・サクソン民族が合縦独立して新共和国を翹造するの一事ならん。

結 論

濠太利は我が南方の好隣国なり。其幅員我が48万方里、人口は凡そ350万あり。即ち一方里内に人口の比例7人奇零三なりとす。試みに之を日本国の一方里内人口の比例にすれば、7億2,528万人を保有することを得べし。若しこれを我国淡路島の一方里内人口の比例にすれば、無慮24億8,016万人を保有することを得べし。而して其人民の購買力を予輩日本人と比較すれ

ば、殆んど3億万の人口を保有するに等とす。嗚呼濠洲は第2の重米利加なり、金の里なり、綿羊の大牧場なり、自由の国たり、進歩の国たり、我日本の好隣国たり、日本物産の大市場（将来の）たり。予輩豈に南洋の近事を冷眼視せんや。

記者云ふ、上記に記載する處は重もに鄙著の「南洋時事」発刊後に發生したる出来事を蒐集し、以て一篇の論文に編成したるものなり。若し夫れ我読者諸士中に「南洋時事」を保有さるる仁あらば、何卒同書中の紀事と前後相對照されんことを祈願するものなり。時に22年1月28日、会ま筆を納むに臨み一絶を得たり。曰く投筆向空憐我迂、十年心血付長吁、看来身世悠悠事、笑署江湖一腐儒。

第六章 濠 洲 の 前 途

濠洲の各植民地が本国と分離して自立聯合するの成否に到りては、今日に當りてこれを判断すること易からずと雖も、往を推して來を察すれば、其前途の大勢を予想するは難きに非ず。蓋し近年欧州各国にては虚無、社会、共產、無政府等の主義中等以上の人民の間に行はれ、動もすれば社会の平和安寧を傷毀するもの甚だ尠しとせず。其源因たるや、半熟未入室の教育を受けたる人民が漫に過激極端の理論に心酔して無道無理の旨義を懷抱し、竟に此の惡結果を誘致せるものなりと雖も、其主要なる大源因は抑も彼れに非ずして此れにあり。即ち旧開国の状態を視るに人口の増殖するに比すれば事業甚だ進暢せず、勞力の供給益々増加して其需用随て減少し、勞力の競争者愈々出でて其賃銀愈々低く、生計愈々艱難なり。是に於てか此輩は事々物々不平不満ならざるは無く、富有を瞻望しては徒に其達意を歎羨し是と比較して自己の落魄を長嘆し、竟に一片不満の氣は猜忌嫉妬の念と化し、漸く長に敵し上に抗するの惡意を發生したるものならん。而して此不平不満の私念は今の社会が上下相転倒するに非らざるよりは、到底已むべからざるものなり。然れども天斯の黎民を生ず、豈にこれを濟ひこれを福するの法無しとせんや。蓋し此輩が過激暴慢の主義を奨説する原因は、單に衣食住の缺亡より生じたるものとせば、若し夫れ此が衣を厚くし食を豊かにするもの其間に存するあれば、一片不平不満の念は自から減少消失するものならん。而して此念を減少消失するは唯此輩が勞力の需用繁多にして、且其賃銀の高貴なる箇處に移住せん事を誘致するの一方法あるのみ。又旧開国に於ては人口の稠密なるを以て土壤の残余特に尠く其価随て貴し。然れば農家の規模も亦自から偏少にして其利潤随て豊かならず、且土壤の残余乏しきが故に漸次山林も伐採して新田園を開墾せざる可からず。然れば山林伐採の結果は水利の涸歛地質の瘦薄を促し、遂に土壤の生産力を減殺する事ならん。是に於てか農民は漸く衣食の缺亡を告げ、不平不満の念は共產、虚無の旨義と共に其間に發生せざるを得ざるなり。然ればこれを救済するの法も亦此輩をして土壤広く且空地多き新邦土に移住せしむるにあり。又旧開国に於ては其邦土の故きが故に1,000年の都市

漸く頽敗して汚穢不浄の物質其間に堆積し、自から疫疾の原子を発育す。寧ろ新開国の山幽にして水清く大氣新鮮にして、瘴霧少く事々物々悉く清浄潔冽なるに若かざるなり。是を要するに旧開国に於ては人口愈々増殖して生計の程度愈々艱難を告げ、其結果は貧窶、悪行、破廉恥、放蕩、自棄、疾病、癡狂より一般社会の錯乱を促し、漸く倫理の陵夷退歩を誘ふに至る。而して此れを救済し此れを矯正するは、唯此輩無産の生民が新開国に移住して衣食住の欲亡を補充するの一法在るのみ。濠洲大陸の面積は48万方里（日本里程にして）人口は凡そ350万なり。即ち一方里内に人口の比例七奇零三なりとす。試みに是を日本国的一方里内人口の比例にすれば、7億2,528万人を保有する事を得べし。若しこれを我国淡路島的一方里内人口の比例にすれば、無慮24億8,016万人を保有するを得べし。濠洲大陸内に未だ空地の残余あるものを見をて徴すべし。吁嗟、天公此大陸を造りて此蒼生を済はんとす、濠洲前途の繁華想ひ見るべきなり。

むすびにかえて

以上のように、漢文脈の格調高くかつ明治日本の青年学徒らしい経綸と気概とに満たされた本書の文意は、一読して明快であるが、ここで蛇足ながら、各章の要点などに触れておき、全篇の意義を考察する一助としたい。

第一章は、筆者志賀重昂による濠洲事情紹介の導入部として、その濠洲客遊中の一夜、宿舎で就寝中の重昂の夢の中で、枕頭に出現した一人の「濶眼大顙一目して有為の士」が重昂に話しかけるという趣向で「濠洲未来の大勢」を説くというものである。すなわち、まず内部的に見た濠洲内各州相互間の協調・団結の必要性和、対外的契機からするその連邦国家としての独立の必然性とを指摘している。（この問題は、本書第五章であらためて詳細に論述される。）なお、本章の内容が、濠洲の未来にかかる「夢物語」として述べられているとともに、その構成そのものが「夢」形式をとっていることが興味をひくところである。本稿第Ⅱ章の末尾ちかくでもちょっと触れたが、重昂とはほぼ同時代の人、菅沼貞風もまたその著『¹⁾変小為大新日本の図南の夢』の巻頭において、著者自身が仮托された「無名居士」がたまたま隅田川畔で午睡中の夢に「白髪朱顔隆準にして濶眼」なる一老人があらわれ、一巻の書を与えられるという趣向を用いており、重昂のそれと構成のアイデアが共通しているのは、偶然の一致というよりも、むしろ先覚的著述にみられる「夢物語」パターンとして、より一般化して考察する価値がありそうである。

第二章は、濠洲内各州において、1876年から1886年にわたる約10年間に見られる社会経済的

1) 菅沼貞風『新日本の図南の夢』（岩波文庫本3082、昭和17年12月刊、岩波書店）

変化の指標として、人口・耕地面積・家畜頭数・公債発行高・州政府歳入額・州税額・公有地払下面積のそれぞれの増加、輸出・輸入貿易価額の変化および鉄道・電線の延長の伸びなどの統計数値を掲げている。さらに別表において、各州別にその位置・面積・人口・地勢・政体・宗教・教育・人種・人情・国防・財政・気候・職業・物産・貿易品・交通・都邑・開港および度量衡の各項目についての簡単な紹介がなされている。そして、これらの指標にあらわれた国勢の伸長トレンドからして、濠洲が将来わが国の有望な商品輸出市場となることを予測し、日本人の有志者がもっと濠洲事情に関心を持つべきであるとしている。

第三章では、明治初期以来の「殖産興業」のスローガンのもと、わが国においては工業化つまり生産諸施設の近代的整備・拡充に重点が置かれてきているが、すでに相当その進展がみられるところから、生産に対応する流通とくに海外輸出市場の開拓の重要度がいよいよ高まったとして、わが国の東・西および北の三方面に比し従来比較的閑却されてきた南方とくに濠洲大陸の市場的役割の増大という点を強調している。そして、通商ルートにあたる太平洋南北航路の自然的好条件を述べ、また日本から輸出する品目としては米・絹製品・陶磁器や特産原料商品、軽工業製品その他の雑貨を挙げ、その一方、日本へ輸出する品目としては、羊毛・毛糸および石炭などを挙げている。とくに近年に至り濠洲国内でも日本を有力な羊毛販売市場として評価しつつあり、メルボルンにおいて輸出振興の組織的な動きが見られることに触れ、わが国としてもこの機に應じるべきだとしている。

第四章では、北半球に属する日本と南半球に属する濠洲との間の貿易関係について、季節的商品の商機ギャップを考慮に入れるべきこと、むしろそれをわが国工業生産体制の合理的再編成に資すべく逆に利用すること、および日本と比較して相対的に購買力の大きいことから濠洲が日本商品輸出市場として有望であることを述べ、あわせて日濠間貿易のもたらす諸般のメリットを10項目挙げて力説している。

第五章では、濠洲各州国家がいずれ近い将来において連邦としてまとまり、独立国家となることの必然性について、内外両面の要因を挙げて議論を展開する。すなわち、まず内因的には濠洲国内社会経済の進展がおのずから住民の意識の向上・覚醒をうながし、本国イギリスの植民地政策を批判し、各州間の小異を超えて「非本国主義」の大同に就かしめつつあり、それはとりもなおさず、植民進化の法則にかなうものであること、さらに外因的には、国際外交の局面で、本国イギリスの国益優先のために、南太平洋問題の取扱いにおいて濠洲はしばしば不利益を忍諾させられてきたことから、いっそう連邦・独立への動きが促進されつつあることを述べ、結論として日本の立場から、濠洲のそうした自立化路線に即して、わが国も同国と友好的連繫を確立すべきであるとした。

最後に第六章において筆者は、近年欧州先進諸国に在って深刻化しつつある社会主義のラディカルな政治的動向にかんがみ、その過激な反体制的潮流の淵源が資本主義発展にともなう貧

富の格差の拡大のなかで貧困者大衆の「不平不満」にあるとし、その社会問題を「前向きに」解消する方策として、それらの人々を比較的高賃金の労働力として受け入れ得る開発途上の新天地つまり一種の労働力再配分政策のフィールドとしての濠洲の役割を強調し、あわせてそれらの移民労働力により濠洲自体の開発の進展も期待できるものとした。もとより筆者のこの意見は、かの「白濠主義」が台頭する以前のものであったことに留意せねばなるまい。

さて、ここに示されたような濠洲を含めての南方地域への近代日本人による政治的・経済的関心の所産は、けっしてこの志賀重昂の『南洋時事』ひとつに限られていたのではなかった。以下、先にも触れた矢野暢の整理にしたがえば「日本が開国したあとの状況の中であらわれた、いわば近代的装いをもった『南進論』は、明治10年代末まではあらわれず、明治20年代に集中的に噴出している。²⁾」たとえば、重昂の『南洋時事』(明治20年)、菅沼貞風の『新日本の図南の夢』(明治21年、ただし刊行は昭和15年)、田口卯吉の「南方経略論」(明治23年)などの著述や、その一方では若山儀一によるメキシコ植民論の提唱(明治22年)、田口卯吉による南島商会の創設(明治23年)などの動きを見れば、それがうなづかれる。このように、当時、日本人の南方地域への関心を急激に盛上げた契機としては、ひとつには廃藩置県以来の内政的課題たる士族授産が、明治22年の士族授産金制廃止により一転機を迎えたことから、あらたに海外植民と結びつける新構想が台頭しつつあったということ、いまひとつは、太平洋海域における諸島嶼群をめぐる欧州列強の領土分割戦が明治10年代末期より激化してきたのに対処して、海防設備充実の勅諭が發布され(明治20年3月)、皇室から金30万円が「下賜」されるなど、「海国日本」のスローガンが対外的な危機感をこころにして強く叫ばれるようになったというような内・外の状況が挙げられよう。

つまり、志賀重昂の『南洋時事』もまた、こうした時代を生きる日本人の現実認識の一所産にはかならなかった。しかし、重昂のこの著作のすぐれてオリジナルな意義は『『南洋』を『西洋』や『東洋』と違ったものとして捉え、日本人の知的関心の対象として新しい地理的範囲を区切ってみせた³⁾』ところにあり、それはまさに重昂その人のユニークな地理学者としての問題との取組みが、よく成し得たものであった。それと同時に、他のいくつかの「南進」論的著述と同じく「日本の国策としての『南進』政策に多少とも理論的影響を与えた⁴⁾」という点は、やはり重昂その人の国土型人格のおのずから反映するところであったとみられる。たしかに、烏島や南鳥島の日本帰属問題に果たした彼の積極的役割はそれを雄弁に裏書するものであり、またこの『南洋時事』の題材たる見聞や情報を入手する機会が日本帝国海軍の軍艦に便乗した周遊の旅であったということは、いささか象徴的であるといえよう。

2) 矢野暢『「南進」の系譜』(中公新書412, 昭和50年10月刊, 中央公論社) p. 49

3) 矢野暢, 前掲書 p. 50

4) 同上, p. 51

さあれ、志賀重昂が、いちはやく『南洋時事』によって示した南方地域への民族的関心は、それが先鞭をつけたかたちで、それ以後、彼の主観的意図にかかわりなく、わが国の「南進」論的イデオロギーとして時代の流れのなかに変転、増幅していき、ついには昭和前期の帝国主義的拡大「国策」と癒着、野合し、太平洋戦争の敗戦という不幸な帰結を迎えたのである。しかしながら、重昂の『南洋時事』を、昭和前期のそうした軍事的「南進」主義の政策的破綻にいたるイデオロギーの原点として短絡し、単純に批判ないし過少評価するのはむしろ誤まりであろうと思われる。

すくなくとも、本稿において紹介した「濠洲夢物語」を見るかぎり、筆者重昂の強く主張する点は濠洲との貿易関係の確立と拡充の必要性、ないしは日本資本主義の商品販売市場および原料供給市場としての開拓の可能性ということであった。それは、さきに矢野暢が『南洋時事』全般について「けっきょく志賀が説きたかったことは、日本人の平和的＝商業主義的な海外雄飛であったようで、『海外到ル処ニ大和民族ガ莞然タル温顔ヲ見ンコトヲ冀望スルモノナリ、海外到ル処ニ商業的ノ新日本ヲ創造センコトヲ希願スルモノナリ』と書き、さらにこの本の最後を『海外到ル処ニ商業的ノ新日本ヲ創造スルコソ、汝ガ今日の便命ナレ、汝ガ今日ノ急務ナレ』とよく似た文章の繰り返しで閉じている⁵⁾」と指摘したところに帰一するものであった。

もちろん、輸出入の品目やその数量・価額・バランスなど貿易構造においては、時代の進展にともなう変化があるとはいえ、こんにちわが国とオーストラリアとの間の経済的相互依存関係が日々深まりつつあることを思うとき、われわれにとっては、明治の先覚者志賀重昂の対濠関心のあり方からなお多くの学ぶべきものがあるといつてよからう。

＜付 記＞

本稿において史料として紹介するにあたり、『志賀重昂先生：濠洲夢物語』の借覧・複写について多大の便宜を供与していただいた大分大学経済学部の畠山秀樹助教授および文献利用サービス担当部局の各位に厚く感謝の意を述べる。なお、この史料の所在調査や内容の紹介・解題作業については、昭和56年度文部省科学研究費の交付を受けたことを明記しておく。(1982.3.15)

5) 矢野、前掲書 pp. 58～59